ChatGPT

Gemini 4 Argonによる知的財産業務の変革可能性：知財実務・リスク・導入設計の総合評価

エグゼクティブサマリー

結論から言えば、Gemini 4 Argonは、現時点で「知財専門家を置き換えるモデル」ではなく、「大量の一次資料を読み、証拠付きの中間成果物を作り、複数ステップの調査・分析を遂行する知財コパイロット／エージェント」として非常に有望である。 特に、先行技術調査、クレームチャート、特許ランドスケープ、出願・審査履歴の分析、IPデューデリジェンス、契約レビュー、訴訟資料整理のような、**大量資料・長文脈・反復的証拠照合**を要する仕事との適合性が高い。一方、FTO（Freedom to Operate）、新規性・進歩性の最終判断、出願書類の確定、訴訟戦略、ライセンス条件決定などは、法的判断、法的地位の最新性、証拠の完全性、秘密保持、専門家責任が支配的であり、Argon単独での自動化は推奨できない。Google自身もモデルカードで幻覚、時折の遅延・タイムアウト、知識の陳腐化を既知の制約として明示している。 [1]

日付については整理が必要である。Googleは米国時間2026年9月30日にArgonを発表し、当初はFairwind Program経由の限定展開としていた。日本語のGoogle Blog記事は10月1日付である。**全世界向けの一般提供開始は米国時間2026年10月13日**で、開発者・企業にはAPI／AI Studio／Geminiプラットフォーム、対象加入者にはAntigravity、Geminiアプリ、SearchのAI Modeなどで提供された。したがって、ユーザーが指定した「2026-10-13 US time」は「初回発表日」よりも正確には**global availabilityの日付**である。 [2]

Argonの知財向けの最大の技術的価値は、単純な「高性能LLM」であることより、次の能力が同時に存在する点にある。

評価軸	知財実務への意味
1,048,576トークンの統合コンテキスト	特許ファミリー、包袋、Office Action、契約、訴訟資料を案件単位で横断分析しやすい。入力・思考・出力が同一枠を共有するため、1Mすべてを入力には使えない点に注意。 [3]
最大約1Mトークンのlong decode	巨大なクレームチャート、ランドスケープレポート、DD台帳などの長時間タスクに向く。通常同期出力のデフォルトは65,536トークン。 [3]
PDF・画像・動画・音声をネイティブ入力	公報本文だけでなく図面、スキャン資料、製品写真、技術動画、証言録音等を同一分析パイプラインに載せられる。出力はテキスト。 [3]
Google Search Grounding／File Search／RAG／URL Context	モデル内部知識を唯一の情報源とせず、公開一次資料や社内資料に根拠を限定できる。Google Search Groundingは最新Web情報への接続と検証可能な出典提示を目的としている。 [4]
Function Calling／Code Execution／Structured Outputs	特許DB、権利管理DB、DMS、契約DB、表計算、評価モデル等を「検索→計算→分析→JSON化」のワークフローとして連結できる。 [3]
企業向けセキュリティ	Google管理環境では学習利用制限、VPC-SC、CMEK等が利用可能。ただし機能ごとの差異、とりわけRAG Engineのデータレジデンシー制約を個別に確認する必要がある。 [5]

評価軸	知財実務への意味
閉鎖型のマネージドモデル	公開資料上、Argonの重みを顧客環境へダウンロードして自己ホストする真正なオンプレミス版は確認できない。オンプレミスからPSC＋VPN／InterconnectでGoogle管理APIへ私設接続するハイブリッド構成は可能。[6]

性能面では、Googleのモデルカード上、ArgonはVals Index 68.9、Harvey Legal Agent Benchmark 19.6など、知識労働・法務系の代理指標で強い数値を示す。一方、これは**特許新規性、FTO、クレーム解釈などを直接測るIP専用ベンチマークではない**。さらにGoogleの評価資料では、非Geminiモデルの一部スコアが各プロバイダーの公表値に由来している。このため、「法務ベンチマーク首位＝特許業務でも最も正確」と読み替えるのは不適切である。[7]

実際、第三者ベンチマーク運営元ValsのLegalBenchでは、2026年10月12日時点でClaude Fable 5.1が88.51%、Argonが88.30%と非常に近く、Argonがすべての法律タスクで一貫して優位というわけではない。したがって**モデル選定はブランドではなく、自社の過去案件から作ったIP-specific gold setで決めるべきである。**[8]

Google自身が公表した実務例としては、Isomorphic LabsがArgonで複雑なPDFや特許を統合・分析し、関連情報抽出の作業を「数週間から数時間」に短縮したとしている。これはベンダー公表事例であって独立検証ではないものの、Argonの長文書・特許分析能力がGoogle側でも主要用途として認識されていることは重要である。[9]

本レポートの推奨導入原則は「RAG-first、evidence-first、human-final」である。 すなわち、

> **Argonに法律を記憶から答えさせるのではなく、正しい資料を検索させ、資料中の根拠箇所を引用させ、機械検証をかけ、最後は資格・権限を持つ人間が判断する。**

この設計であれば、JPOが2026年の「JPO AIビジョン」で掲げるリスク対応と積極活用の両立や、EPOが採用する「AIは人間の専門性を補完し、実体判断の責任は人に残す」というhuman-centricな方向性とも整合的である。[10]

Gemini 4 Argonの能力、公式仕様、知財への技術的含意

リリースとモデル仕様

2026年10月13日版のGoogle公式モデルページによれば、モデルID`gemini-4-argon`であり、Stableモデルとして提供される。入力は**テキスト、画像、動画、音声、PDF**、出力はテキストである。コンテキストは入力と出力を合わせた**1,048,576トークンの統合ウィンドウ**で、通常の同期処理では最大出力65,536トークン、long decodeでは最大1,048,576トークンまで拡張できる。[11]

Googleが公式に列挙している機能には、Code Execution、Computer Use（Preview）、File Search、Function Calling、Google Search Grounding、Google Maps Grounding、Structured Outputs、URL Context、low／medium／highのThinking、agentic video understandingが含まれる。一方、画像生成、音声生成、Live APIはArgonではサポートされない。[3]

アーキテクチャについてGoogle DeepMindのモデルカードはArgonを**大規模なsparse mixture-of-experts Transformer、native multimodal model**として説明しているが、総パラメータ数や1推論当たりのactive parametersは公開していない。したがって、「モデルサイズ」をIP導入判断に使う場合、未知のパラメータ数を推測するより、**実際の知財ベンチマーク、レイテンシ、コスト、エラー率を見る方が合理的**である。[12]

知識カットオフは2026年3月であり、Google自身が「分野によってはそれより古い可能性がある」と注意している。この一点だけでも、2026年3月以降の出願公開、審決、判決、権利消滅、譲渡、商標状態などを内部知識から回答させる設計は不適切である。Google Search Grounding、特許庁DB、商用特許DB、社内DMSなどへのライブ検索が実務上の前提になる。[13]

長文脈は「巨大プロンプト投入」より「選択的RAG」と組み合わせるべき

1Mトークンは知財に極めて魅力的だが、**1Mトークン丸ごと投入すればRAGが不要になるわけではない**。Argonではコンテキストが入力、モデルのthinking、function calls、最終出力で共有されるため、巨大入力は推論・出力に使える余地を圧迫する。Googleもlong decodeではコンテキスト全体の管理が必要であるとしている。[14]

知財では、たとえば100件の公報全文を無選別に入れるより、

クエリ展開 → 検索 → family/dedup → paragraph/claim単位retrieval → rerank → Argonによる分析

の方が、検索再現率、引用精度、コスト、監査可能性を管理しやすい。

Google CloudのGrounding／RAG関連サービスは、モデル出力を検証可能な情報源に結び付けることを目的としている。Check Grounding APIでは、候補回答と根拠文書の整合性について0–1のsupport scoreを返し、各主張に対する根拠を返せるため、「引用が付いている」だけでなく**引用が本当に主張を裏付けるかを二段階でチェックする構成**が可能である。[15]

引用は強みだが「引用あり＝正しい」ではない

Google Search GroundingはリアルタイムWeb情報へのアクセスと出典提示をサポートし、APIの`groundingMetadata`には`groundingChunks`や`groundingSupports`等の証拠情報が返される。企業内データについてはAgent Search、RAG Engine、Elasticsearch等をGroundingソースにできる。[16]

しかし、知財で本当に必要なのはURLそのものではなく、

> 文献番号 → 公開日／優先日 → claim/paragraph/page/figure → 引用テキスト → その引用がどの結論を支えるか

という**provenance chain**である。

したがって、特許調査ではモデルに自由形式引用を作らせず、RAGレイヤー側で`document_id`、publication number、family ID、priority date、paragraph number、claim number、source hashを保持し、モデルが存在しない文献番号やページ番号を生成できないschemaにすることが望ましい。

Googleの評価値をどう読むべきか

Googleの公式モデルカードでは、主な比較値として以下が示されている。これらはArgonの能力の有力な手掛かりだが、特許専用評価ではない。[7]

ベンチマーク	Gemini 4 Argon	GPT-6 Astra	Claude Fable 5.1	Claude Opus 5.5	IP上の意味
Vals Index	**68.9**	63.1	65.8	67.0	法務・財務等を含むprofessional workの代理指標
Harvey Legal Agent Benchmark	**19.6**	5.4	6.7	3.8	法律調査・ドラフティングへの近似。ただし特許専用ではない
AutomationBench	**51.3**	41.4	31.4	42.5	多段階の業務自動化に関連
GraphWalks ～128k	**99.7**	98.7	91.4	90.6	長文脈中の関係追跡能力
GraphWalks 256k–1M	**84.2**	71.8	65.0	66.8	大量包袋・大型DDへの示唆
LVBench	**91.7**	87.5	79.7	83.7	長尺動画・視覚資料分析への示唆

特にGraphWalksの256k–1M領域で性能が下がること自体が重要である。**「1Mトークンを受け取れる」と「1Mトークン中の細部を完全に正確に追跡できる」は別物**だからである。[17]

幻覚・セキュリティ防御

GoogleはArgonについて間接的prompt injectionへの防御を強化し、多層的なsecurity/safety対策を公表している。しかしモデルカードは依然としてhallucinationを既知の制約と明記している。したがって、prompt injection耐性を「事実誤認が起きないこと」や「悪意あるPDFを完全に安全に処理できること」と同一視してはいけない。[18]

知財では、第三者公報、Webページ、契約付属資料、データルーム文書の中にモデルへの命令文が紛れ込む可能性を想定し、**retrieved contentをinstructionではなくuntrusted evidenceとして扱う**実装が必要になる。

知財業務別の適用可能性とリスク評価

以下の表で、ユーザー指定の主要IP業務をArgonの具体的機能にマッピングする。ここでいう「適合度」は、完全自動化の適合度ではなく、**人間専門家を含む管理されたワークフローでのAI支援価値**を本レポートが評価したものである。EPO自身もpre-search、分類、関連先行技術の特定、法務照会、議事録等でAIを利用しつつ、実体判断の責任は人間に置いている。[19]

知財業務	Argon機能と推奨用途	期待効果	主要な精度・法律リスク	必須の緩和策	適合度
特許明細書・クレームドラフティング	1M context＋PDF＋Structured Outputで発明届、実験資料、先願、既存明細書を統合。claim→support mapping、従属項案、実施形態案を生成。 3	初稿作成、用語統一、記載漏れ探索を高速化	unsupported embodiment、added matterにつながる情報追加、過度に狭い／広いclaim、inventorshipへの影響	「入力に明示された事項以外を技術的事実として追加禁止」。各claim elementを原資料へ逆リンク。弁理士・発明者が最終承認	
先行技術調査	Function Callingで特許DB／非特許文献DBへ検索、Code Executionでquery expansion・CPC/IPC集計、RAGで段落取得	キーワード、分類、意味検索を反復するagentic searchに強い	最重要は**recall failure**。検索されなかった文献をLLMは評価できない。文献番号の幻覚	LLM自身の記憶を検索結果扱いしない。複数検索戦略、公式DB＋商用DB併用、既知文献seed test、検索ログ保存	
新規性／特許性分析	Structured Outputsでclaim limitationを原子化し、各文献とのelement-by-element表を生成	大量候補文献から一次スクリーニング	複数文献を無意識に混ぜた「モザイク新規性」、claim construction誤り、法域差	「新規性は1文献ごとに独立判定」等、法的テストをsystem promptで固定。結論ごとに段落・claim引用。専門家レビュー	
FTO	RAG＋legal-status API＋family graph＋長文脈で対象製品と生存claimをマッピング	大量特許群の優先順位付けに非常に有効	**最終FTO意見には不十分**。権利存続、補正、継続出願、claim construction、均等論、国別法が支配的	対象国・基準日固定、最新register照会、family/continuation確認、人間によるclaim construction。AI結果は「triage」と明記	
クレームチャート	PDF・画像＋Structured Output。claim element→製品資料／公報箇所の対応をJSONで生成	最も相性が良い用途の一つ	inferential leap、証拠のない機能を「対応」とする危険	`explicit / inferred / not found`の3値分類。引用のないセルは自動的に未立証扱い。source hash保存	

知財業務	Argon機能と推奨用途	期待効果	主要な精度・法律リスク	必須の緩和策	適合度
特許ランドスケープ	Code Execution＋embeddings/vector DB＋1M contextでcluster、taxonomy、時系列、assignee分析	数千〜数万件の定量分析と要約	重複family、名寄せ、CPC偏り、モデルによる分類ドリフト	family normalization、assignee master、gold-labeled sampleによる分類精度測定。クラスタごとに人間サンプル監査	
審査・権利化対応	Office Action、引用例、過去補正、審査基準をRAGし、拒絶理由別のargument optionsを作成	応答案の論点漏れチェック、引用例比較	不要な自認、estoppel、期限誤認、古い審査基準	「提出文ではなくレビュー用草案」と固定。最新庁資料をRAG。期限はdocketing systemをsource of truthにする	
特許翻訳	native multilingual＋長文脈でclaims/specification全体の用語一貫性を維持	大量翻訳、対訳表、claim terminology統一	「自然な翻訳」が法的範囲を変える危険、antecedent basis、数値・単位誤り	claim glossaryを固定、原文・訳文alignment、数値機械照合、back translationは補助に限定、専門翻訳者／弁理士レビュー	
特許価値評価	Function Calling＋Code Executionでcitation、family size、市場、残存期間、ライセンス情報を統合	portfolio triage・scenario analysis	相関を価値と誤認、非公開取引条件、将来収益仮定	定量スコアと法律評価を分離。DCF等の仮定を明示しsensitivity analysis。AIに「単一の真の価値」を出させない	
ライセンス交渉支援	長文脈で契約、portfolio、claim chart、過去交渉を整理。BATNA・論点表を生成	準備時間短縮、条件比較	privilege/confidentiality、AIが交渉相手の意図を過剰推論、royalty base誤り	access segregation、交渉シナリオと事実を明示的に分離、人間が全対外文書を承認	
IPポートフォリオ管理	Function Callingでdocketing／年金／製品DBと連携、Code Executionで維持・放棄候補スコア	更新判断の優先順位付け	stale legal status、経営価値を単純スコア化	docketingをauthoritative systemにし、AIはwrite-back不可を初期設定。廃棄・放棄はdual approval	

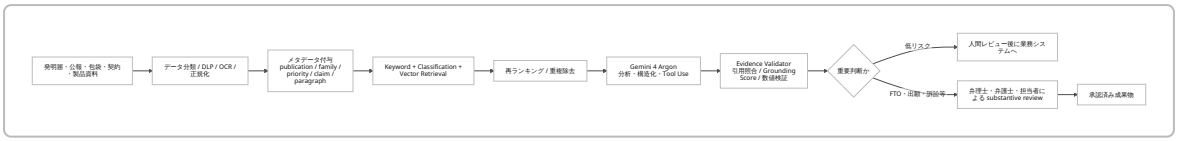
知財業務	Argon機能と推奨用途	期待効果	主要な精度・法律リスク	必須の緩和策	適合度
商標検索・監視	text＋image multimodalityで文字、図形、音・意味の類似候補をscreening	logo／word markを統合した一次監視	類否は法域、指定商品・役務、著名性等に依存。意味的類似の過検出／見落とし	official registry＋画像検索＋人間判断。モデルscoreを法的結論と呼ばない	
知財訴訟支援	巨大record、expert report、deposition、画像／動画証拠を横断しtimeline・issue mapを生成	discovery、証拠整理、矛盾探索	privilege waiver、hallucinated precedent、証拠chain-of-custody問題	privileged corpus隔離、case-lawは一次法源限定、原証拠hash、AI生成物と証拠原本を分離	
IPデューデリジェンス	RAG＋function toolsでownership、encumbrance、family、契約、訴訟を横断	M&A／投資DDの網羅性・速度向上	data roomの欠落を「不存在」と誤認、chain of title見落とし	`not found ≠ does not exist`をプロンプトで固定。missing-document registerを出力し、法務確認へ送る	
契約／IP条項ドラフト	契約テンプレートとplaybookをRAGし、license grant、ownership、feedback、indemnity等を抽出・比較	clause deviation検知と初稿生成	定義間の不整合、準拠法差、第三者IPリスク	approved clause libraryからのみ生成、redline＋理由＋source clauseをセットで返す	
秘密保持・倫理・コンプライアンス	enterprise IAM、VPC-SC、CMEK、private RAG、audit log等で統制	AI利用の中央管理・監査	営業秘密流出、個人情報、privilege、prompt injection、過剰権限	データ分類、allowlist、least privilege、DLP、retention policy、利用ログ、定期red team、禁止用途設定	

USPTOもAIツール使用について、AIで生成された提出物であっても既存の手続・専門家責任に関するルールが適用され、AIを未検証のまま利用しないよう注意を促している。したがって、上記の「human-final」は単なる保守的設計ではなく、主要特許庁の政策方向とも一致する。[20]

また、JPOは2026年に生成AIを利用した検索インデックス「GAIA-Index」の業務導入に向けた実証を進めており、EPOもAIをpre-search、分類、関連先行技術特定などへ実運用している。AIによる検索支援そのものは、もはや実験的な発想ではない。重要なのは、**検索補助と法的結論を分けること**である。[21]

特許業務で最も有望なワークフロー

Argonの導入優先順位は、法的不可逆性が低く、検証可能性が高い順に設定するとよい。



自動化しやすいものは、分類、要約、抽出、翻訳初稿、既存テンプレート比較、claim element decomposition、文献候補ランキングである。

人間承認を絶対に外すべきでないものは、出願・補正の確定、FTO意見、無効／侵害判断、訴訟提出物、ライセンス最終条件、権利放棄・年金不納判断である。EPOもAIは専門家を代替するのではなく補完するという原則を明示している。 22

推奨アーキテクチャ、RAG、データガバナンスとセキュリティ

三つの導入パターン

公開情報中心のPoCではGemini API／AI Studioから始められる。Argonは2026年10月13日からAPIでグローバル提供され、Googleの公式モデルIDは `gemini-4-argon` である。公開公報・公開判決だけを使う先行技術分析やランドスケープの試験には最も簡便である。 23

機密発明・契約・訴訟情報を扱う本番環境では、Google Cloudの企業向け環境＋private RAGを推奨する。Googleはmanaged modelについて、顧客の事前許可・指示なしに顧客データをモデル学習・fine-tuningに利用しないと説明している。またGoogle Cloud側ではVPC Service Controls、CMEK等のセキュリティ統制が提供される。 24

既存のオンプレミス知財システムを外に移したくない企業では、オンプレDMS、PLM、発明管理システムを保持しながら、Private Service ConnectとCloud VPN／Cloud Interconnectを介してGoogleの管理された推論サービスへ接続するハイブリッド構成が現実的である。Googleはこのオンプレミス→Agent Platformのprivate connectivityを公式に文書化している。 6

ただしこれは**Argonそのものをオンプレサーバーで稼働させる構成ではない**。2026年10月13日時点のGoogle公開資料からは、Argonのモデル重みの配布やcustomer-managed on-prem inferenceは確認できない。したがって、発明情報について「データが物理的に社外処理環境へ一切出てはいけない」という要件がある企業では、Argonの採用可能性そのものを法務・セキュリティ部門が判断する必要がある。 25

推奨知財RAG

知財RAGでは「普通の社内検索」よりメタデータ設計が重要である。

```
authoritative sources
    │
    ├── Patent offices / paid patent databases
    ├── Prosecution histories
    ├── Internal invention disclosures
    ├── Product / BOM / technical documents
    ├── License and assignment agreements
    └── Litigation / DD data rooms
    │
    ▼
classification & access control
```

```
    │
    ▼
parser / OCR / language normalization
    │
    ▼
chunking
    ├── claim element
    ├── patent paragraph
    ├── office-action issue
    └── contract clause
    │
    ▼
metadata + vector / lexical index
    │
    ▼
hybrid retrieval + reranking
    │
    ▼
Gemini 4 Argon
    │
    ▼
citation / grounding validation
    │
    ▼
human IP review
```

GoogleのAgent Searchは自社文書をRAGの情報源としてモデルへgroundでき、最大10のAgent Searchデータソースを組み合わせられ、Google Search Groundingとの併用も可能である。既存のElasticsearchを使ったgroundingもGoogleがサポートする。[26]

ベクトルDBについてはGoogle管理のRAG Engine／Vector Searchを利用してもよいし、既存のElasticsearch等を維持してもよい。重要なのは製品名ではなく、次のメタデータを落とさないことである。

文書種別	保存すべき代表メタデータ
特許	jurisdiction、publication/application number、priority、family、CPC/IPC、assignee、inventor、legal status、claim/paragraph/figure番号
包袋	application、event date、document type、claim version、Office Action type
製品資料	product/version/date、confidentiality class、component、source owner
契約	counterparty、effective date、term、territory、field、licensed patents、change-of-control、confidentiality
訴訟資料	matter、privilege、custodian、evidence ID、hash、date、protective-order classification

これにより、モデルが自然言語で“似ている”と言うだけでなく、**どのバージョンのどの証拠に基づくか**を機械的に追跡できる。

RAG Engineのセキュリティ上の注意点

Google Cloud全体を「VPC-SC/CMEK対応だから全部同じ」と扱ってはいけない。Googleの現行ドキュメントではGemini Enterprise Agent Platform自体はdata residency、CMEK、VPC-SC、Access Transparency等をサポートする一方、**RAG EngineについてはVPC-SCとCMEKはサポートするが、data residencyとAccess Transparencyはサポートしない**と明記されている。 [27]

これは特に日本企業の未公開発明、輸出管理対象技術、顧客NDA情報、訴訟privilege資料を扱う際に重要である。

したがって本番設計前に、

モデル推論、RAG corpus、vector DB、prompt logs、agent runtime、grounding serviceの各々についてデータ所在地・保持期間・暗号鍵・アクセスログを別々に確認する

必要がある。

Grounding with Google SearchやMaps、RAG EngineはGoogle Cloudのdata-residency条件に例外があることも公式のData Residency資料に示されている。 [28]

秘密情報のデータ分類

推奨する最低限の区分は次の4層である。

レベル	例	Argon利用方針
Public	公開公報、公開判決、公開製品情報	通常のAPI/RAG利用可
Internal	公開済み発明に関する社内メモ	enterprise環境のみ
Confidential	未公開発明、契約、ロードマップ	private enterprise environment＋least privilege
Restricted	訴訟privilege、M&A、輸出規制、極秘R&D	明示許可された隔離環境のみ。場合によってはArgon利用禁止

個人向けGeminiアプリへ未公開発明を手動コピーペーストする運用と、契約・セキュリティ条件が明確な企業向けAPIを、同じ「Gemini」として扱うべきではない。企業データを扱う際は実際に契約しているサービスのterms、retention、abuse-monitoring、地域設定を確認する必要がある。Google Cloudのmanaged modelでは無断学習をしないという約束があるが、それだけで営業秘密管理上の義務が自動的に満たされるわけではない。 [29]

プロンプト設計と実務ワークフロー

知財向け共通system prompt

Argonの性能を知財へ転用する際、質問だけを投げるより、**役割、法域、基準日、証拠ルール、禁止行為、出力schema**を固定することが重要である。

以下は汎用テンプレートである。

```
ROLE
あなたは知財専門家を支援する分析エージェントである。
あなた自身が最終的な法的判断を行うのではなく、検証可能な中間成果物を作成する。

JURISDICTION
対象法域: [JP / US / EP / ...]
基準日: [YYYY-MM-DD]

SOURCE POLICY
1. 提供された資料および許可された検索ツールの結果のみを事実の根拠とする。
2. モデル内部の記憶だけに基づき、特許番号、判例、法令、法的地位を断定しない。
3. 根拠がない場合は "NOT FOUND" と回答する。
4. "NOT FOUND" は "存在しない" を意味しない。

CITATION POLICY
各重要主張について、
- source_id
- document/publication number
- page/paragraph/claim
- supporting text
を返すこと。

UNCERTAINTY
各判断を:
A = explicit support
B = reasonable inference
C = unsupported / unresolved
に分類する。

PROHIBITED
複数文献の内容を一つの文献に存在するかのように統合しない。
存在しない引用、特許番号、ページ番号を生成しない。

OUTPUT
JSON schemaおよび人間向けレビュー表を出力する。
```

この形式はStructured Outputsと相性がよく、ArgonはStructured Outputsを公式にサポートする。[3]

先行技術・新規性分析の例

```
対象請求項1を、技術的に意味のある最小限のclaim limitationsに分解してください。

次に、検索ツールから取得された文献ごとに独立して、
各limitationについて以下を返してください。

- disclosed_explicitly
- disclosed_inherently
- not_disclosed
- uncertain
```

```
必ずparagraph/claim/figure番号と原文引用を付してください。

重要:
新規性評価では複数文献を組み合わせてはいけません。
一つでも根拠引用がないlimitationがある場合、その文献について
"all elements disclosed" と結論してはいけません。

最後に、
1. novelty candidates
2. partial-match references
3. unresolved limitations
4. additional search concepts
を分けて提示してください。
```

ここで重要なのは「新規性があるか？」と直接聞かないことである。先に**claim decomposition → evidence extraction → legal conclusion**へ分けることで、モデルの早すぎる結論を抑えられる。

FTOの例

```
これは最終的なFTO法律意見ではなく、弁護士・弁理士レビュー用の
triage analysisです。

対象:
製品バージョン: X
対象国: 日本
基準日: 2026-10-14

各候補特許について:
1. 独立請求項をelement化
2. 製品資料中の対応証拠を特定
3. explicit / inferred / absent / unknown に分類
4. application/family/legal-status dataをtoolから取得
5. alive / expired / pending / unknownを表示
6. continuation/divisional/family memberを列挙
7. 不明点を「追加調査事項」として残す

法的地位がtoolで確認できない場合は推測禁止。
侵害の最終結論を出さない。
```

FTOでは「侵害あり／なし」を直接生成させるより、**risk-ranked claim map**を作らせる方が実用的である。

クレームチャートの例

```
請求項を各limitationに分割し、製品資料との対応表を作成してください。

各行には:
claim_text
normalized_limitation
```

```
product_evidence
source_document
page/figure
status = EXPLICIT | INFERRED | NOT_FOUND
confidence
review_note

を含めてください。

INFERREDの場合は、どの推論ステップが必要かを明示してください。
引用が存在しないセルをEXPLICITにしてはいけません。
```

特許ドラフティングの例

```
提供された発明届および実験資料からのみ技術的事実を取得してください。

まず発明の候補的な発明概念を3階層:
- core concept
- optional limitations
- implementation details
に分類してください。

その後、
独立請求項案を3案作成し、
各claim elementについて
「入力資料のどの記載がsupportするか」を表にしてください。

入力資料に存在しない技術的特徴を補完しないでください。
supportが不十分なものは［SUPPORT GAP］と表示してください。

最後に、
- enablement questions
- terminology inconsistencies
- missing embodiments
- inventor questions
を発明者への確認事項として列挙してください。
```

AIに「完全な明細書を書いて」と頼むより、このように**support matrixを先に作る**方がadded matterや作り話の抑制に向く。

翻訳の例

```
この特許明細書の英日翻訳を行います。

以下を固定用語集として扱ってください:
[glossary]

要件:
- claim terminologyは全請求項で完全に統一
```

```
- 原文にない限定を追加しない
- 原文の限定を削除しない
- 数値、範囲、単位、reference numeralを変更しない
- antecedent basisをチェック
- "comprising", "consisting of", "configured to" 等の
  法的意味を勝手に平易化しない

出力:
1. translation
2. term-alignment table
3. ambiguous source phrases
4. differences requiring patent-attorney review
```

Agentic workflowでは「書込み権限」を分離する

Function CallingとComputer UseはArgonの強みだが、Computer Useは**Preview**である。 [3]

したがって、初期段階では、

```
検索：自動可
読取：自動可
分析：自動可
ドラフト作成：自動可
社内保存：条件付き
外部送信：人間承認
特許庁への提出：人間承認必須
契約署名：AI禁止
権利放棄 / 年金停止：AI禁止
```

という権限モデルが適切である。

知財システムでは「良い文章を生成できるか」より、**誤った行動を実行できないこと**の方が重要である。

他の主要LLMとの比較、コスト、パイロット評価

Gemini 4 Argonと主要フロンティアモデル

2026年10月14日時点の公開仕様に基づき、知財向けに比較すると以下のようになる。性能値はプロバイダー／ベンチマークごとに条件が異なるため、厳密な同一条件ランキングではない。

評価項目	**Gemini 4 Argon**	**GPT-6 Astra**	**Claude Opus 5.5**	**Claude Fable 5.1**
最大コンテキスト	**1,048,576 unified** [3]	約1.05M [30]	1M [31]	1M [31]
最大出力	通常65,536、long decode最大約1M [3]	128K [30]	128K [31]	128K [31]

評価項目	**Gemini 4 Argon**	**GPT-6 Astra**	**Claude Opus 5.5**	**Claude Fable 5.1**
ネイティブ入力	**text/image/video/audio/PDF** [3]	text/image [32]	text/image [33]	text/image [33]
Web grounding	Google Search Grounding、出典metadataあり [4]	Web Search、sourced citationsあり [34]	Web Search＋citations [35]	同左 [35]
private RAG	File Search、Agent Search、RAG Engine、Elasticsearch等 [36]	File Search＋vector stores [37]	Search Result Blocks／citations対応 [38]	同左
Code/tool use	Code Execution、functions、Computer Use preview [3]	Function/tool ecosystem、web/file search等 [39]	tool use＋code execution [40]	同左
Vals Index*	**68.9**	63.1	67.0	65.8 [17]
Harvey Legal Agent Benchmark*	**19.6**	5.4	3.8	6.7 [17]
LegalBench別評価	88.30%	—	—	**88.51%** [8]
レイテンシ	モデルカードが時折のslowdown/timeoutsを明記。LegalBench測定例12.62秒 [41]	ワークロード依存。単一の普遍的APIレイテンシ値なし	AnthropicはOpusを相対的に“Moderate”と整理 [33]	相対的に“Slower” [33]
商用データ学習	Paid APIは製品改善に使用しない。Cloud managed modelsも無許可学習なし [42]	Business/APIデータは原則学習に使用しない [43]	commercial inputs/outputsはデフォルトで学習不使用 [44]	同左
標準API入力価格	**$2/M〜11月30日、$4/M〜12月1日** [45]	$10/M [30]	$4/M [31]	$10/M [31]
標準API出力価格	**$10/M → $20/M**、thinking含む [45]	$50/M [30]	$20/M [31]	$50/M [31]
IP適性の総評	**大量文書・multimodal・agentic IP分析で特に強い**	強力な総合推論＋検索。画像中心案件にも有力	長文・引用重視の法務ワークに有力	法務推論で強力だがコスト・速度を評価すべき

* Googleのモデルカードに掲載された比較値であり、非Gemini値の一部は各プロバイダー公表値を用いる。独立したIP-specific head-to-head試験ではない。 [46]

この比較から重要なのは、Argonが常に絶対的に高精度ということではなく、

「1M unified context＋非常に長いdecode＋音声／動画／PDFのネイティブ入力＋Google系grounding＋Google Cloud統制」を一つにまとめている

点である。

特にIP-DD、訴訟、複雑な製品証拠分析では、動画・PDF・画像まで同じモデルへ渡せる点は差別化要素になる。逆に、純粋なテキスト法律分析だけならClaude系やGPT-6 Astraも十分に競争力があり、自社案件でhead-to-headテストする価値がある。Claudeは独自RAGについてもsource/titleと対応した引用を生成できる仕組みを公式提供している。 38

価格の読み方

2026年11月30日までArgon Standardは100万入力トークン$2、出力（thinking含む）$10で、2026年12月1日からそれぞれ$4、$20になる。Free TierはArgonにはない。Implicit cacheは入力料金の95%引き相当で、明示的context cachingはArgonではサポートされない。 45

Batch／Flexは導入期間中、入力$1/M、出力$5/Mで、12月1日から$2/$10となる。Priorityは$3.60/$18から$7.20/$36へ移る。大量ランドスケープや夜間ポートフォリオ分析ではBatch／Flexを検討する価値がある。 45

たとえば、1案件で

- 入力500,000トークン
- thinkingを含む出力50,000トークン

をStandardで消費すると、モデル利用料金だけなら導入価格期間で概ね **$1.50**、12月1日以降なら **$3.00** となる。実際のTCOには、埋め込み、ベクトルDB、OCR、reranking、検索API、ストレージ、ログ、ネットワーク、再試行、評価、人間レビューが加わる。

Google Search GroundingはGemini 3以降で共有される月5,000検索リクエストまで無料、それ以降は1,000検索クエリ当たり$14であり、1回のユーザー要求から複数検索クエリが発生し得る。 45

したがって知財システムのコストKPIは「$/1M tokens」より、

> **1件の調査を専門家がレビュー可能な品質に到達させる総コスト**

で評価すべきである。

推奨パイロット

モデル導入テストには、過去に結論が確定している**50〜200件程度の案件からgold setを作る**ことを推奨する。これは本レポートの実務提案であり、モデルメーカーのベンチマークをそのまま採用しないための措置である。

代表的な評価指標は以下である。

指標	測定方法	特に重要な業務
Retrieval Recall@k	正解文献が候補k件内に含まれた割合	先行技術、FTO
Critical false-negative rate	重要文献／生存claimを見逃した割合	**FTO、新規性**
Citation precision	引用が実際に主張を裏付けている割合	全知財業務
Citation coverage	検証可能な重要主張のうち引用付き割合	全般
Identifier hallucination	架空の公報番号、判例、paragraph等／100回答	全般
Claim-element accuracy	専門家gold chartとの一致	claim chart、新規性、FTO
Legal-status accuracy	official registerとの一致	FTO、portfolio、DD
Translation critical-error rate	claim scopeを変える誤訳率	翻訳
Draft support defect rate	supportのないclaim element率	ドラフティング
Human acceptance rate	軽微修正以下で採用された割合	全般
Rework minutes	人間修正時間	ROI
p50 / p95 latency	完了時間	interactive workflow
Completion rate	timeoutなしで完了した割合	long-horizon tasks
Cost per matter	AI＋retrieval＋reviewの総額	ROI
Security-policy violation	禁止情報送信／越権tool call	ガバナンス

特にFTOでは平均精度より**重大false negative**が支配的である。候補を多少多く拾うfalse positiveは専門家が削れるが、重要特許を検索段階で落とすfalse negativeは後工程では回復できない。

パイロットではArgonだけでなく、少なくとも1つの競合モデルと現行人手プロセスをblind comparisonするのが望ましい。Google自身のベンチマークだけでは自社の技術領域、法域、文書形式、検索DBを再現していないからである。

推奨SOP、リスクマトリクスと統制モデル

知財AI利用SOP

以下を標準運用手順の最小セットとすることを推奨する。

フェーズ	SOPチェック	Go条件
案件受付	法域、基準日、目的、最終責任者を記録	scopeが明確
データ分類	Public/Internal/Confidential/Restrictedを付与	利用環境が分類に適合
権限確認	corpus、tool、検索DBへのIAMを確認	least privilege
情報源設定	authoritative sourceを指定	source list承認

フェーズ	SOPチェック	Go条件
prompt versioning	system prompt・schema・モデルversionを記録	再現可能
retrieval	query、検索日時、DB、件数を記録	audit trail確保
生成	temperature等に依存せず構造化出力、根拠必須	evidence attached
機械検証	番号、日付、引用、数値、groundingを照合	critical errorなし
専門家レビュー	claim construction、法律評価、戦略判断	named reviewer sign-off
対外利用	出願、通知、契約、訴訟提出は人間承認	authorized approver
保存	prompt、source IDs、model version、output、approvalを保存	retention policy適合
評価改善	false positive/negative、コスト、修正量を記録	benchmark更新

Google CloudのPrompt Managementではprompt templateをバージョン管理でき、CMEKやVPC-SCとの組み合わせもサポートされているため、SOPを単なるWord文書ではなく実装上のversioned controlへ落とし込める。 [47]

リスクマトリクス

リスク	種別	発生可能性	影響	総合	主な統制
架空の公報・判例・引用	技術／法律	中	高	**高**	RAG-only evidence、ID validation、引用照合
重要先行技術の検索漏れ	技術／法律	中	極高	**極高**	hybrid search、複数DB、recall benchmark、人間searcher
FTOで生存claimを見落とす	法律／技術	中	極高	**極高**	live register、family graph、専門家レビュー
生成したclaimに原資料のsupportなし	法律	中	高	**高**	claim-to-support matrix、発明者レビュー
未公開発明の情報漏洩	法律／倫理／Security	低〜中	極高	**極高**	enterprise-only、DLP、VPC-SC、IAM、利用禁止区分
privilege/work product漏洩	法律	低〜中	極高	**極高**	corpus isolation、matter-level ACL、logging
Prompt injectionによる越権tool call	Security	中	高	**高**	untrusted-data isolation、tool allowlist、approval gate
stale law／legal status	法律	高	高	**高**	live grounding、official source、as-of date
商標類否の誤判定	法律／技術	中	高	**高**	multimodal search＋専門家判断

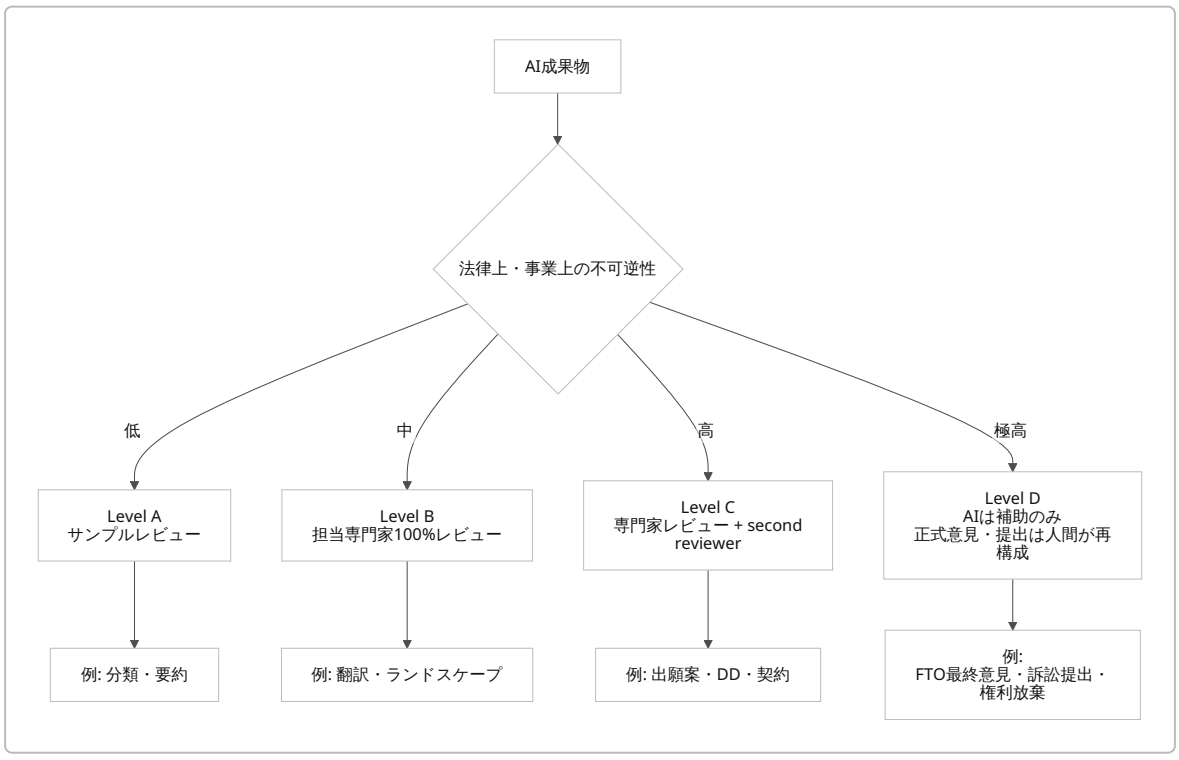
リスク	種別	発生可能性	影響	総合	主な統制
翻訳でclaim scope変化	法律／技術	中	高	**高**	glossary、alignment、numeric check、人間校閲
バイアスのあるportfolio scoring	倫理／経営	中	中	**中**	explainable factors、sensitivity、committee review
Computer Useによる誤提出／誤更新	技術／法律	低〜中	極高	**極高**	read-only default、human confirmation、filing禁止
vendor outage／timeout	技術	中	中	**中**	retry、queue、fallback model、checkpointing
モデル更新による品質drift	技術	中	高	**高**	model pinning、regression test、benchmark gate

Argonのモデルカード自身がhallucination、slowness、timeoutの可能性を明記しているため、最初の行や最後の可用性リスクは仮想的な懸念ではなく、本番設計で明示的に扱うべき既知制約である。 1

Google CloudはVPC Service Controlsについて、サービス境界を作ることで指定リソースからのデータ流出リスクを軽減できると説明している。Argonを未公開発明に使うなら、単にAPI keyを秘密にするだけでなく、ネットワーク、IAM、service perimeter、鍵、ログまで含めた多層統制が必要である。 48

人間レビューの強度をリスクで変える

すべての出力を同じレベルでレビューする必要はない。推奨モデルは次の通りである。



これはJPOのAI活用における「リスクに適切に対応しつつ積極的に活用する」という方針、およびEPOのhuman-centric approachと整合する。[49]

総合評価と優先導入ロードマップ

Gemini 4 Argonは、知財部門にとって単なる文章生成ツールより、**“evidence-processing engine”として評価する方が本質に近い**。1M unified context、長いdecode、PDF／画像／動画／音声のmultimodality、検索grounding、File Search、function calling、code execution、structured outputを同時に持つことにより、従来は「検索システム＋Python＋OCR＋人間の読み込み」に分かれていた処理を一つのagentic workflowとして結合できる。[50]

導入順としては、**第一群**にclaim decomposition、文献要約、包袋要約、契約条項抽出、翻訳初稿、ランドスケープ分類を置くのが適切である。いずれも人間が比較的容易に誤りを発見でき、AIが失敗しても即座に権利喪失へ直結しにくい。

第二群として、先行技術調査、クレームチャート、審査対応案、DD、商標monitoring、portfolio analyticsへ進む。ここからはRAG、公式情報源、評価用gold set、引用検証が本番要件になる。

第三群としてFTO、侵害・無効分析、訴訟、ライセンス戦略、最終出願ドラフトへ広げるべきである。この領域ではArgonがどれほど強くても「autonomous legal decision maker」としてではなく、**専門家が使う分析エンジン**として配置すべきである。USPTOおよびEPOの公式方針も、AIを利用しても専門家・提出者側の責任が消えない方向を明確にしている。[51]

導入の成否を決めるのはモデルそのものより、次の式で表せる。

> **IP-AIの実効品質 ≈ Retrieval Recall × Evidence Fidelity × Model Reasoning × Legal/Technical Human Review**

どれか一つがゼロに近ければ、強力なモデルでも成果物の信頼性は低い。

Argonの最大の弱点もここにある。**モデル内部だけでは、世界中の最新公報、非特許文献、権利の最新status、未公開社内情報を網羅できない。** 知識カットオフは2026年3月であり、Google自身もhallucinationを既知の限界としている。[1] したがって、高性能モデルを購入しただけでは高品質な知財システムにはならない。

反対に、Argonの最大の強みは、この弱点を補うために必要な**RAG、Search Grounding、Tool Use、Code Execution、Structured Outputs、巨大コンテキスト、企業向けCloud統制が同じGoogleスタック上にそろっている**ことである。Grounding APIは引用元を返すことができ、Agent Search／RAG Engineは企業データにモデルを接続できる。[52]

したがって、2026年10月14日時点での総合評価は次のようになる。

項目	評価	理由
特許・法律文書の大量読解	**非常に高い**	1M context、長decode、PDF native
先行技術候補探索	**高い**	agentic/tool/RAG。ただしrecall保証なし

項目	評価	理由
新規性・claim chart	**非常に高い支援価値**	長文脈＋structured evidence mapping
FTO最終判断	**単独利用不可**	legal status、claim construction、法的責任
特許ドラフト	**高い支援価値**	support mapping前提。自律提出は不可
翻訳	**高い**	長文脈・multilingual。ただしclaim校閲必須
IP litigation/DD	**高い**	大量異種資料・multimodalが強み
trademark multimodal search	**高い候補抽出能力**	text/image統合。ただし類否判断は人間
引用・監査性	**高い設計余地**	grounding metadata／RAG citations。ただし検証レイヤー必須
機密情報運用	**企業環境なら有力**	VPC-SC、CMEK、学習利用制限等。ただし各サービスのresidency差を要確認
真正オンプレミス	**弱い／非提供とみるべき**	公開資料上、自己ホスト用Argon weightsなし。ハイブリッド接続は可能
コスト効率	**現時点では高い**	導入価格$2/$10、12月以降$4/$20。競合フロンティアモデルに対して競争的 [53]
完全自律型知財エージェント	**時期尚早**	hallucination、検索漏れ、不可逆な法律行為のリスク

最も現実的な2026–2027年の到達点は「AIが80〜90%の調査・証拠整理・初稿を担当し、最後の法律判断と対外行為を人間が持つ」ような役割分担であり、「AI弁理士」を作ることではない。 これはあくまで導入設計上の目標値であってArgonの公式精度保証ではないが、現在のモデルの能力と既知制約、そして特許庁側のhuman-centricなAI利用方針を踏まえると最もリスク調整後価値が高い構成である。 [54]

とりわけ有望なのは、**「1人の知財専門家＋Argon＋専用RAG＋特許検索ツール＋機械的citation validator」**という構成である。Googleが公表するIsomorphic Labsの特許・PDF分析事例は、この方向がすでに現実の専門業務で試されていることを示す。 [9]

一方、導入判断において最も重要なのはGoogle、OpenAI、Anthropicの一般ベンチマーク順位ではない。最終的には、自社の過去案件から作った**先行技術、FTO、claim chart、Office Action、翻訳、契約、DDのgold set**を、Argon・GPT-6 Astra・Claude系・現行人手フローに同じ条件で解かせ、critical false negatives、citation precision、human rework、総コストを比較することである。

その試験でArgonが勝つなら、本モデルは知財業務の「チャットボット」ではなく、**検索・分析・証拠化・ドラフティングを横断する新しい知財作業基盤**になり得る。Googleが10月13日に世界提供した機能構成を見る限り、Gemini 4 Argonの知財における最大のインパクトは、専門家の判断そのものを自動化することではなく、**専門家が判断に到達するまでの情報処理コストを桁違いに圧縮できる可能性**にある。 [55]

---

[1] [12] [13] [41] [54] Gemini 4 Argon - Model Card
https://deepmind.google/models/model-cards/gemini-4-argon/?utm_source=chatgpt.com

2 Gemini 4 Argon: our next era of frontier intelligence
https://deepmind.google/blog/gemini-4-argon-our-next-era-of-frontier-intelligence/?utm_source=chatgpt.com

3 11 25 50 Gemini 4 Argon | Gemini API | Google AI for Developers
https://ai.google.dev/gemini-api/docs/models/gemini-4-argon?utm_source=chatgpt.com

4 16 Grounding with Google Search - Interactions API
https://ai.google.dev/gemini-api/docs/google-search?utm_source=chatgpt.com

5 27 Security controls for machine learning services
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/machine-learning/security-controls?utm_source=chatgpt.com

6 Gemini Enterprise Agent Platform networking access ...
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/machine-learning/general/netsec-overview?utm_source=chatgpt.com

7 17 Gemini 4 Argon - Model Card — Google DeepMind
https://deepmind.google/models/model-cards/gemini-4-argon/

8 LegalBench Leaderboard and Methodology
https://www.vals.ai/benchmarks/legal_bench?utm_source=chatgpt.com

9 Gemini 4 Argon is now available for everyone
https://deepmind.google/blog/introducing-gemini-4-argon/

10 49 特許庁におけるAI活用の基本方針「JPO AIビジョン」について
https://www.jpo.go.jp/system/laws/sesaku/ai_action_plan/ai_vision/?utm_source=chatgpt.com

14 Developer's guide to Gemini 4 Argon | Gemini Enterprise Agent Platform | Google Cloud Documentation
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/models/guides/gemini-4-argon

15 Check grounding with RAG | Agent Search
https://docs.cloud.google.com/generative-ai-app-builder/docs/check-grounding?utm_source=chatgpt.com

18 Developing Gemini 4 Argon responsibly and safely
https://blog.google/innovation-and-ai/technology/safety-security/gemini-4-model-safety-security/?utm_source=chatgpt.com

19 AI use at the EPO
https://www.epo.org/en/news-events/in-focus/digital-innovations/ai-use-at-the-EPO?utm_source=chatgpt.com

20 51 USPTO issues guidance concerning the use of AI tools by ...
https://www.uspto.gov/about-us/news-updates/uspto-issues-guidance-concerning-use-ai-tools-parties-and-practitioners?utm_source=chatgpt.com

21 自動生成・自動付与型検索インデックス「GAIA-Index」
https://www.jpo.go.jp/system/patent/gaiyo/bunrui/fi/gaia_index.html?utm_source=chatgpt.com

22 EPO President discusses future of global IP system at ...
https://www.epo.org/en/news-events/news/epo-president-discusses-future-global-ip-system-aippi-world-congress?utm_source=chatgpt.com

23 55 Gemini 4 Argon: Built to solve your hardest problems
https://blog.google/innovation-and-ai/models-and-research/gemini-models/introducing-gemini-4-argon/?utm_source=chatgpt.com

24 29 Gemini Enterprise Agent Platform and zero data retention
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/resources/zero-data-retention?utm_source=chatgpt.com

26 36 Grounding overview | Gemini Enterprise Agent Platform
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/models/grounding/overview?utm_source=chatgpt.com

28 Google Cloud Platform Services Data Residency
https://cloud.google.com/terms/data-residency?utm_source=chatgpt.com

30 GPT-6 Astra Model | OpenAI API
https://developers.openai.com/api/docs/models/gpt-6-astra?utm_source=chatgpt.com

31 Claude Sonnet 5 - Claude Platform Docs
https://docs.anthropic.com/en/docs/about-claude/models/whats-new-sonnet-5?utm_source=chatgpt.com

32 Models | OpenAI API
https://developers.openai.com/api/docs/models?utm_source=chatgpt.com

33 Models overview - Claude Platform Docs
https://docs.anthropic.com/en/docs/about-claude/models?utm_source=chatgpt.com

34 Web search | OpenAI API
https://developers.openai.com/api/docs/guides/tools-web-search?utm_source=chatgpt.com

35 Web search tool - Claude Platform Docs
https://docs.anthropic.com/en/docs/build-with-claude/tool-use/web-search-tool?utm_source=chatgpt.com

37 File search | OpenAI API
https://developers.openai.com/api/docs/guides/tools-file-search?utm_source=chatgpt.com

38 Search results - Claude Platform Docs
https://docs.anthropic.com/en/docs/build-with-claude/search-results?utm_source=chatgpt.com

39 OpenAI API Platform Documentation
https://developers.openai.com/api/docs?utm_source=chatgpt.com

40 Code execution tool - Claude Platform Docs
https://docs.anthropic.com/en/docs/agents-and-tools/tool-use/code-execution-tool?utm_source=chatgpt.com

42 45 53 Gemini Developer API pricing
https://ai.google.dev/gemini-api/docs/pricing?utm_source=chatgpt.com

43 Business data privacy, security, and compliance
https://openai.com/business-data/?utm_source=chatgpt.com

44 Is my data used for model training? - Anthropic Privacy Center
https://privacy.anthropic.com/en/articles/7996868-is-my-data-used-for-model-training?utm_source=chatgpt.com

46 Gemini 4 Argon Model evaluation
https://deepmind.google/models/evals-methodology/gemini-4-argon

47 Prompt management | Gemini Enterprise Agent Platform
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/reference/models/prompt-classes?utm_source=chatgpt.com

48 VPC Service Controls with Gemini Enterprise Agent Platform
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/machine-learning/general/vpc-service-controls?utm_source=chatgpt.com

52 Grounding API | Gemini Enterprise Agent Platform
https://docs.cloud.google.com/gemini-enterprise-agent-platform/reference/models/grounding?utm_source=chatgpt.com